

中国社会科学学会 2013年度大会

会場：東京大学文学部1番・2番大教室（法文2号館2階）

主催：中国社会科学学会 Tel: 03-5841-3746, Fax: 03-5841-3744, E-mail: shabun@hyper.ocn.ne.jp

参加費（シンポジウム資料代）1,000円 非会員の来聴歓迎

2013年7月6日（土）

自由論題報告 13:00～17:00 1番大教室

第一部（13:00～14:30）

司会：茂木 敏夫（東京女子大学）

1880年代における広州格致書院の創設と地域社会——地域エリートと宣教師を中心に

……………土肥 歩（日本学術振興会特別研究員PD）

コメンテーター：菊池 秀明（国際基督教大学）

差異をめぐる中国近代思想史——『湘学新報』を中心に

……………古谷 創（東京大学大学院生）

コメンテーター：菊池 秀明（国際基督教大学）

第二部（14:45～17:00）

司会：鈴木 将久（一橋大学）

廃止か改良か——五四時期の試験をめぐる論争

……………森川 裕貫（日本学術振興会特別研究員PD）

コメンテーター：川尻 文彦（愛知県立大学）

近代中国における「漢人回教徒」説の展開——1930年代のムスリム・エリートによる言説を中心に

……………山崎 典子（東京大学大学院生）

コメンテーター：吉澤 誠一郎（東京大学）

「満洲国」におけるラジオドラマの変容——娯楽放送から「国民演劇」へ

……………代 珂（首都大学東京大学院生）

コメンテーター：松重 充浩（日本大学）

会員総会 17:00～17:30 （1番大教室）

2013年7月7日（日）

シンポジウム 中国のジェンダー構造の歴史的変容 10:00～17:00 1番大教室

共催：科研基盤C「歴史的視点による中国のジェンダー秩序に関する総合的研究」（研究代表者：小浜 正子）

NIHU 東洋文庫現代中国研究資料室ジェンダー資料研究班

午前の部 10:00～12:15

恋愛と受験の誕生

……………妹尾 達彦（中央大学）

明清女性史研究と毛宗崗本『三国志演義』

……………仙石 知子（日本学術振興会特別研究員RPD）

コメンテーター：大木 康（東京大学）

司会：小浜 正子（日本大学）

懇親昼食会 12:15～13:30 （2番大教室）[会費1,000円]

午後の部 パネルディスカッション 13:30～17:00

清末の女性メディアにおける国家民族ディスコースと女性意識（中国語、通訳あり）……………夏 曉虹（北京大学）

清末中国における男性性の構築と日本……………吉澤 誠一郎（東京大学）

兵操から軍訓へ……………高嶋 航（京都大学）

1920年代中国のセクシュアリティ論議——張競生と丁玲による異曲……………江上 幸子（フェリス学院大学）

司会：坂元 ひろ子（一橋大学）

◇ 1880年代における広州格致書院の創設と地域社会——地域エリートと宣教師を中心に

土肥 歩

【報告要旨】本報告は1888年広州に創設されたキリスト教系教育機関である広州格致書院について取り上げる。従来、同書院開校については、広州の地域エリートであった李宏彰と陳子橋が、400人におよぶ署名を得てアメリカ長老教会布教団に請願書を送ったことが開校の契機であったと確認されている。しかし、従来の研究は地域エリートによる請願書提出の背景や宣教師側の認識については、関心が及ぶことはなかった。このため、本報告では宣教師の書簡や請願書の内容分析、地域エリートらの背景の解明によって、同書院設立を地域社会とキリスト教布教との交わりという観点から論じる。

本報告を通じて、反キリスト教運動が頻発した時代にあっても、中国沿岸地域においてはキリスト教会排斥以外の構図が存在したことが確認される。すなわち、従来夙に論じられてきた排外運動と並行して、地域社会レベルにおいてはキリスト教団体の活動への「支持」が存在していたと言えよう。

【報告者紹介】土肥歩(どい・あゆむ)、1983年生。専門は中国近現代におけるキリスト教史。東京大学大学院総合文化研究科単位取得後退学。現在、日本学術振興会特別研究員PD(京都橘大学所属)。主要論文「清末在外中国人と中国キリスト教布教事業」(『東洋学報』94巻3号、2012年)、「中国キリスト教史から見た辛亥革命」(日本孫文研究会編『グローバルヒストリーの中の辛亥革命』、2013年)。

◇ 差異をめぐる中国近代思想史——『湘学新報』を中心に

古谷 創

【報告要旨】戊戌変法期において、湖南省が西洋や日本に倣った変革の中心であったことは、すでに多くの研究が論じている。ただ、同地域が変法運動のわずか数年前に発生した、大規模な排外運動の震源地でもあったことに関しては、十分に注意されて来なかった。異質な他者に対する態度としては、両者は正反対に思えるが、それではなぜ排外から変革への急転換は可能になったのだろうか。このような問題意識に基づき、本報告では1897年に湖南省で創刊され、変法運動を推進した『湘学新報』(のち『湘学報』に改題)を取り上げる。同紙に掲載された記事を分析することで、変法運動においても排外運動とは別種の差異への敵意が存在したことを明らかにしたい。更に、同紙で紹介された海外情報及び世界認識は、変革の青写真となった、康有為『大同書』や譚嗣同『仁学』などとも深く関わっていることを併せて指摘したい。

【報告者紹介】古谷創(ふるや・はじめ)、1983年生。専攻は中国近代思想史。信州大学人文学部卒。現在東京大学大学院総合文化研究科博士課程在籍。主要論文・報告として「張之洞“煽惑”初探——以対維新派的批判為中心」(『“政治精英与近代中国”国際学術研討会論文集』、掲載予定)、「論張之洞対反洋教運動的批判——以“煽惑”為線索」(第十三届兩岸四地歴史学研究生論文発表会)など。

◇ 廃止か改良か——五四時期の試験をめぐる論争

森川 裕貫

【報告要旨】 中華民国成立以降、清末新政下での教育改革も踏まえつつ、中国各地に各級の学校が設置された。これらの学校では、学生の成績評価のために各種の試験が実施されたが、その試験のあり方については不満が示されていた。1919年になると五四運動の影響などからその不満が一気に噴出し、教師や学生を主たる執筆者として、試験のあり方をめぐり大きな論争が生じた。論争の担い手は、試験廃止派と試験改良派に大別される。前者は学校における試験を「科挙の変相」と糾弾し、その即時廃止を唱えた。これに対して試験改良派も、現行の試験に様々な害悪が内包されていることを承認し、その改良を積極的に主張したが、試験廃止には反対した。本報告では双方の示した具体的論拠を紹介しつつ、その思想的背景にも目配りすることで、五四時期中国の一つの側面を明らかにしたい。

【報告者紹介】 森川裕貫（もりかわ・ひろき）、1979年生。専攻は中国近現代史。東京大学博士（文学）。現在、日本学術振興会特別研究員PD（京都大学人文科学研究所）。主要論文に、「君子と制度——第三革命前後における梁啓超と章士釗の政治論」（『現代中国』82号、2008年）、「中国社会主义論戦時期における張東蓀の言論とその反響」（『東洋学報』93巻2号、2011年）など。

◇ 近代中国における「漢人回教徒」説の展開——1930年代のムスリム・エリートによる言説を中心に

山崎 典子

【報告要旨】 本報告は、漢語を話すムスリムの「民族」的地位をめぐる20世紀前半に展開された「漢人回教徒」説——漢語を話すムスリムは単一の「民族」ではなく、漢人のムスリム集団であるという言説——の形成過程を明らかにし、その歴史的意義を検討することを目的とする。具体的には、まず、報告者の過去の研究成果に基づきながら、20世紀初頭から1920年代の時期のムスリム・エリート（宗教指導者、教育家、知識人、軍人など）による「漢人回教徒」説の概要を提示する。次に、以下の数点に留意しながら、1930年代にムスリム・エリートが唱えた「漢人回教徒」説の分析を試みる。第一に、1930年代とその前の時期の「漢人回教徒」説の連続性。第二に、同時期にムスリム・エリートの一部によって体系化された「回教民族」説との連関。第三に、漢人の政治家や歴史地理学者が提唱した「漢人回教徒」説からの影響。

【報告者紹介】 山崎典子（やまざき・のりこ）、1986年生。専攻は中央ユーラシア史、中国ムスリム研究。東京大学教養学部卒業。現在同大学院総合文化研究科博士課程在学、日本学術振興会特別研究員。主要業績「日中戦争期の中国ムスリム社会における『親日派』ムスリムに関する一考察：中国回教総連合会の唐易塵を中心に」（『中国研究月報』65巻9号、2011年）、「日本の回教工作」『中国のムスリムを知るための60章』（明石書店、2012年）など。

◇ 「満洲国」におけるラジオドラマの変容——娯楽放送から「国民演劇」へ

代 珂

【報告要旨】 「満洲国」において、ラジオドラマは放送開始直後から娯楽放送としてつくられたが、文化統合や国民創出の要求から、次第に「国民演劇」へと変容させられた。しかし、一方的に放送側・統治側の意図に合わせて作られた「国民演劇」は、娯楽性と文学性を失い、聴取者から不評を買ったことも事実であった。

本報告は当時の刊行物に対する調査を通じて、娯楽放送と「国民演劇」とのジレンマに位置する「満洲国」のラジオドラマを考察するものである。検閲に引っかかった第二放送・中国語放送の娯楽劇「新天地」と第一放送・日本語放送の「国民演劇」の代表作と思われる「悠花抄」を比較することをとおして、当時の文化統制の状況を探る。その上、新聞の投書から聴取者の声を集めて分析し、こういった文化政策の下に置かれた放送に対する聴衆の受容についても検討したい。

【報告者紹介】 代珂（だい・か）、1985年中国安徽省生まれ。専攻は「満洲国」メディア論、植民地文化論。現在、首都大学東京大学院博士後期課程在学。主要論文に「『満洲国』における学校放送とその機能」（『人文学報』No. 478、首都大学東京中国文学教室、2013年）、「ラジオにみる『満洲国』の文化宣揚—国際放送を中心に」（『知性と創造』4号、日中人文社会科学学会、2013年）がある。

シンポジウム
中国のジェンダー構造の歴史的変容

2013年7月7日(日) 10:00~17:00 1番大教室

企画の趣旨

中国社会におけるジェンダー構造や性規範が大きく変容を遂げた唐宋時期から清末民国時期を対象に、文学・歴史・思想の分野からその新たな歴史像を探る。

唐宋変革以降の中国社会については、儒教が浸透し女性に対する規制・抑圧も強化されたと見るものと、先進的近代社会のはじまりと見る二重の評価が存在する。本シンポジウムの午前のセッションでは、妹尾達彦氏と仙石知子氏にこのような議論に対しジェンダーの視点を導入した報告をお願いし、新たな議論の展開を期待する。また、清末民国期に王朝・天下構造から国家・国民構造へと変換がはかられる過程では、西洋近代モデルの受容、激しい儒教批判も現れた。では、はたしてこの中国の近代(モダン)の潮流はジェンダー構造にどのような影響をあたえたのだろうか。午後のパネルディスカッションでは、これらの問題をめぐって、夏暁虹氏、吉澤誠一郎氏、高嶋航氏、江上幸子氏に国家、民族、家族、セクシュアリティの側面から問題提起・討論を行っていただく。

本シンポジウムでは、このような歴史的変革期におけるジェンダー構造の変容について、男性性と女性性の構築をキーワードに、様々な学問領域の知見を集めて議論を展開し、新たな中国の社会文化状況を浮き彫りにする。そして本シンポジウムが中国のジェンダー史研究の深化と発展を促す強い刺激となることを期待する。

報告要旨

午前の部 10:00~12:15

恋愛と受験の誕生

妹尾 達彦(中央大学)

受験や恋愛という制度は、人類の歴史の中でいつ誕生し、どのような経過をへて現在にいたっているのだろうか? そもそも、恋愛とは何なのか? 本報告の目的は、試験による業績主義社会の誕生を契機に、9世紀の中国大陸の都城において、受験と恋愛という社会制度が連結して誕生することの歴史的意味を考えることである。まず、限られた階層の男性のみを対象とする制度にすぎない科挙が、制度として一度動き出すと、ダムに空いた小さな穴のように構造の全体に影響をあたえていくことを指摘する。次に、恋愛と受験が複合することで生み出された才子佳人小説と、その対抗文化ともいえる武俠小説の関連をてがかりに、「男らしさ」と「女らしさ」の流動性を論じる。最後に、近年のジェンダー研究の成果を参照しながら、われわれの生きる現在の世界が、9世紀につくられた恋愛と受験の制度的枠組みの中に、今なお居つづけていることの意味を考えてみたい。

明清女性史研究と毛宗崗本『三国志演義』

仙石 知子(日本学術振興会特別研究員 RPD)

明清社会におけるジェンダー構造や性規範については、二つの異なる見方が並存している。一つは、儒教が朱子学から陽明学へと展開し、規範として社会に浸透することにより、女性への規制・抑圧が強化されたという主張である。もう一つは、これに反して、近代社会における女性の役割への尊重が見られるという主張である。本報告は、『三国志演義』の分析を通じて、明清社会の女性について「妻と妾」、「孝と貞節」、「母と子」の三点に焦点を当て、上記二視座の有効性を探る。明清社会における女性は、後者が主張するように、自己の生涯を犠牲にしてまで男性に追従したり、絶対的な服従を強要されるほど圧倒的な儒教の抑圧を受けていたわけではない。しかし、前者が目指す儒教によって形成された宗法制度上の男女の役割に、大きくその生き方を規定されていた側面も無視することはできないのである。

清末の女性メディアにおける国家民族ディスコースと女性意識 (中国語、通訳あり)

夏 曉虹 (北京大学)

日清戦争後、知識界の中心議題は中国をいかにして弱から強に転じるかに移った。この背景のもとに現れた女性メディアは、自ずと最初から救国強国の使命感を帯び、女性意識の発露はそれゆえこれと密接な関係があった。中国最初の女性新聞は、1898年7月24日、「百日維新」(戊戌の変法)の中で生まれた《女学報》である。その後重要なものには、陳擲芬主編の《女報》(後に《女学報》に改名)、丁初我主編の《女子世界》、燕斌主編の《中国新女界雑誌》および何震主編の《天義》などが続いた。これら新聞・雑誌の思想源を考察すると、最初は西洋(宣教師の訳述を主とするもの)と伝統の再解釈であったのが、徐々に日本の力を借りるようになったことがわかる。そして女性の自己期待も、それに応じて「賢母」から「女国民」に変化している。その中で、無政府主義を唱道していた《天義報》は、国家の徹底的な否定と絶対的な男女平等の実現を要求する点で独特の風格を有しており、より深い思考をとまなうものだった。

清末中国における男性性の構築と日本

吉澤 誠一郎 (東京大学)

中国ナショナリズム形成の一貫として、男らしさの追求という現象があった。これは、清末の一時期に「尚武」という言葉でたびたび表現された理想であった。ナショナリズム形成とジェンダー再編とが密接に関連していたことは、本報告が前提とする認識といえる。

欧米で複雑に展開してきた近代家族理念は中国でも相当な影響力があったと言うこともできる。他方で、明治日本の軍国主義が中国男性の知識分子に与えた示唆もまた無視することはできない。当時の中国語文献にみられる「武士道」は、明らかに日本語に由来している。とすれば、井上哲次郎などによって明治日本に広められていた家族倫理は、どれほど当時の近代世界において普遍的なものであり、逆にどれほど日本の固有性があったのかという点を考慮することによって初めて、中国への影響の歴史的意味も十分に考察することができるはずであろう。この課題を実証的に探究するのは相当に難しいが、近代中国における男性性の構築について理解するために避けて通れない問いと考えている。

兵操から軍訓へ

高嶋 航 (京都大学)

1904年、日本の学制にならって定められた癸卯学制において、高等小学堂と中学堂の体操として、男子学生に兵式体操(兵操)が課された。1923年にアメリカの学制の影響を受けた壬戌学制が成立すると、兵式体操は廃止される。それからわずか6年後、こんどは高級中学以上の男女学生に軍事訓練(軍訓)が義務づけられた。同時代の西洋、さらには日本、朝鮮、フィリピンなどと比較した場合、中国の兵式体操・軍事訓練がたどった経緯はきわめて特異なものであった。そもそも、学校でいかなる人間を養成すべきかは、当該社会の男性性と密接に結びついた問題である。兵式体操・軍事訓練の問題とは、換言すれば、軍事的男性性をいかに評価するかという問題でもあった。したがって、兵式体操・軍事訓練の紆余曲折をもたらしたのは、中国における男性性の変化、もしくは揺れであったと考えられる。

1920年代中国のセクシュアリティ論議——張競生と丁玲による異曲

江上 幸子 (フェリス女学院大学)

五四期以降の中国では性や愛をめぐる議論が活発となり、貞操論争、恋愛討論、愛情法則討論、性教育討論、新性道徳論争、『性史』論争などが起こった。これらの議論は近代男性知識人を中心に行われ、伝統的規範に抵抗して女性解放をももたらしたと評価される。しかし一方で、議論においては女性や異端の声が軽視されたり排斥されたりし、新たな規範が形成されて近代的な女性抑圧を生んだりもした。日本からも多くを受容しての議論だったが、例えば女性自身の切実な苦悩表明に始まった日本の貞操論争とは様相に異なる点がある。本報告では、これら1920年代中国のセクシュアリティをめぐる議論を見直し、そこで排除された声の表われとして張競生と丁玲を取り上げ、形成されつつあった近代的規範に対する異論表明とその結果について考えたい。

シンポジウム報告者紹介

◇ 妹尾 達彦 (せお・たつひこ)

中央大学文学部教授。専攻は中国都市史。主な論著に、『長安の都市計画』（講談社、2001年）、『アフロ=ユーラシア大陸の都市と宗教』（共著、中央大学人文科学研究所、2010年）、『アジアから見る日本都市史』（共著、山川出版社、2013年）などがある。

◇ 仙石 知子 (せんごく・ともこ)

日本学術振興会特別研究員 RPD。専攻は中国明清小説。近年の研究テーマは、毛宗崗本『三国志演義』における女性の表現。主な論著に、『明清小説における女性像の研究——族譜による分析を中心に——』（汲古書院、2011年）、『「三国志」の女性たち』（共著、山川出版社、2010年）、「明清小説に描かれた不再娶」（『東方学』118 輯、2009年、第29回東方学会賞）などがある。

◇ 夏 曉虹 (か・ぎょうこう)

北京大学中文系教授。主な専門分野は近代中国の文学思潮、女性生活及び社会文化。ドイツ・ハイデルベルク大学(1998)、日本・東京大学(1999～2001)、香港・嶺南大学(2009～2010)の客員教授を歴任。主要著書に《覚世与伝世——梁啓超の文学道路》(上海人民出版社、1991年。中華書局、2006年)、《晩清文人婦女観》(作家出版社、1995年。日本語訳《纏足をほどいた女たち》朝日選書、1998年)、《詩騷伝統与文学改良》(浙江文芸出版社、1998年)、《晩清女性与近代中国》(北京大学出版社、2004年)、《閲読梁啓超》(三聯書店、2006年)、《燕園学文録》(復旦大学出版社、2011年)などがある。

◇ 吉澤 誠一郎 (よしざわ・せいいちろう)

東京大学大学院人文社会系研究科准教授。主な研究分野は中国近代史。論著として、『天津の近代——清末都市における政治文化と社会統合』(名古屋大学出版会、2002年)、『愛国主義の創成——ナショナリズムから近代中国をみる』(岩波書店、2003年)、「中国における近代史学の形成—梁啓超「新史学」再読」(『歴史学研究』863号、2010年)、「懐疑される愛国心——中華民国四年の反日運動をめぐって」(『思想』1033号、2010年)などがある。

◇ 高嶋 航 (たかしま・こう)

京都大学准教授。近年は東アジア+フィリピンのスポーツや軍隊を男性性の視点から研究している。主な論著に『帝国日本とスポーツ』(塙書房、2012年)、「「東亜病夫」とスポーツ：コロニアル・マスキュリニティの視点から」(石川禎浩・狭間直樹編『近代東アジアにおける翻訳概念の展開』京都大学人文科学研究所、2013年)「菊と星と五輪：1920年代における日本陸海軍のスポーツ熱」(『京都大学文学部研究紀要』52、2013年)などがある。

◇ 江上 幸子 (えがみ・さちこ)

フェリス学院大学国際交流学部教授。専攻は中国近現代文学(丁玲、近現代中国の女性文学・ジェンダー)。主な論著に『中国女性の100年』(青木書店、2004年、共編)、『東アジアの国民国家形成とジェンダー』(青木書店、2007年、共編)、「戦時性被害という「恥辱」の語り——丁玲『新しい信念』の誤訳と削除から」(『近きに在りて』58号、2010年)、「中国女性スパイの表象——張愛玲『色、戒』のモデルを中心に」(『季刊中国』112号、2013年)などがある。